

第二回岡山スポーツフォーラム

シンポジウム「トレイルランニング大会と環境」

2011年3月11日に日本を襲った大震災、私たちは走ることで、何かできないか？と考え、義援金を募り、被災地に思いを馳せる月例のチャリティランを始めました。時とともに、世間の関心は落ち着き、参加者も減り、私たちの側にも、新たな思いが芽生えました。この間で生まれたランナーのつながりを、チャリティランだけで終わらせたくないという思いです。もちろん、当初の思いを忘れたわけではありません。その思いを持ち続けている人たちとのつながりも大切にしたいと考えたのです。 <岡山スポーツフォーラム>

今回のテーマですが、現在日本各地で相当数のトレイルランの大会が開催されています。公的機関の認める世界規模の大会から、クラブ練習会規模のものまで、距離も参加者も規模もさまざまです。

そんな中、一度に多くのランナーが登山道やハイキング道などを走ることで、各地で環境に対する影響を懸念する声が上がっています。また、宗教上の保存道を大人数で走りぬけることに対する批判も聞かれます。愛好者の増加で、いままで山とは無縁だったランナーも多く、運営上の安全面でも課題が考えられます。

- ・環境に配慮した大会とはどういうものなのか？
- ・山や登山道など日本の自然環境の現状はどうか？
- ・理想的な、持続可能な大会のあり方はどうか？

これらについて各方面からの意見を聞き、考えて行きたいと思います。

日時 2014年1月4日(土曜日) 午後1時半～午後4時45分
場所 岡山県国際交流センター (岡山市北区奉還町 2-2)
参加費 無料 (ただし東日本震災への募金をお願いしています)

●キーノートレクチャー「森林を利用する際に知っておきたいこと」

忠政恵(森のスペシャリスト、元林野庁森林官(国有林の管理官))・・・20分

●シンポジウム(各パネリスト約15分～20分)

- 1: 忠政啓文 (NPO 法人全国トレイルランニングガイド普及協会理事長、健康運動指導士ほか)
- 2: 吉永耕一 (富士山エコレンジャー、森林情報士(森林 GIS 部門)、森林インストラクター)
- 3: 貝畑和子 (ウルトラランナー、大陸横断ランナー、トレイルランナー)
- 4: 岡本清次 (元介護福祉士、居酒屋店主、大会運営協力者・ランナー)
- 5: 山崎 裕晶(山岳プロガイド、日本体育協会公認山岳スポーツ上級指導員ほか)

コーディネーター: 山西哲郎(立正大学教授)

●意見交換・質疑応答 (15:45～16:45)

●親睦交流会 17:15～駅前「飛鳥」会費 2,500円 (大人)

トレイルランニング大会の現状と環境への影響を考える

近年空前のブームとなったマラソン。圧倒的な人数が押し寄せる皇居周辺ランニング事情と、その影響はすでにメディアでも問題視され、関係者も手をこまねいておられる状況ではなくなりました。

そのランニングブームの後押しを受けたようにも思えるトレイルランニングの爆発的な人気。ランニングブームに似た状況が、トレイルランニングでも、とりわけ大人数が殺到する大会開催について、環境面や安全面での課題を惹起しているように見えます。

一度に多くのランナーが登山道やハイキング道などを走ること、各地で環境に対する影響を懸念する声が上がっています。また、宗教上の保存道を大人数で走りぬけることに対する批判も聞かれます。愛好者の増加で、いままで山とは無縁だったランナーも多く、運営上の安全面でも課題が考えられます。また個人トレーニングレベルで、死亡事故も起こるなど、安全に対する認識の喚起が急務です。

例えば、大会と参加者数の問題について考えてみます。トレイルラン先進国アメリカでも、近年の大会参加希望者は爆発的に増え、出場機会を得ることが年々難しくなっています。にもかかわらず、各大会の参加者枠が500を超える大会は極めてまれで、1000人を超える大会はただ一つ（2012年現在）。多くは200～500です。逆にヨーロッパでは、巨大スポーツ産業の後押しする大規模な大会が近年開催されるようになりました。19世紀から観光のための登山道を整備してきたヨーロッパだから可能なことかもしれません。日本はどのようなのでしょうか？

今後の大会のあり方について、この問題は避けて通ってはいけない壁だと思います。

そこで、そもそも、山や登山道など日本の自然環境の現状や使用のルールはどのようなのか？

環境（自然、社会）に配慮した大会とはどのようなものなのか？

安全をどう担保してゆくのか？

理想的な、持続可能な大会のあり方はどのようなのか？

今回は、多くの競技者からの意見も、フィールドを同じくする他のスポーツ愛好者や団体の皆さんのご意見もお聴きしながら、このスポーツの真の発展と成熟を、関係者のみなさんとともに考えてゆきたいと思います。

そして、各地でこれからも増え続けるであろう大会の関係者や参加者に対し、なんらかの指針となりうるような会議が持てることを、トレイルランニングを愛するものとして、祈ってやみません。

岡山スポーツフォーラム代表
村松達也

森林を利用する際に知っておきたいこと

1. 森林には、持ち主がいます

日本の森林面積は、国土の3分の2。うち、6割が私有林（企業、個人）、3割が国有林（林野庁）、1割が公有林（地方自治体）。

日本の森林面積の4割は人工林（スギ、ヒノキ、カラマツなど）。

2. 森林の利用規制に関わる法律

森林法・・・「保安林」日本の森林面積の約半分。国土の32%。

◆第34条 第2項

保安林においては、都道府県知事の許可を受けなければ、立竹を伐採し、立木を損傷し、家畜を放牧し、下草、落葉若しくは落枝を採取し、又は土石若しくは樹根の採掘、開墾その他の土地の形質を変更する行為をしてはならない。

※ 違反した場合、50万円以下の罰金

鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律・・・「鳥獣保護区」

自然環境保全法・・・「自然環境保全地域」

自然公園法・・・「国立公園（環境省）、国定公園・都道府県立自然公園（都道府県）」

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律・・・「生息地等保護区」

全国9箇所

文化財保護法・・・「天然保護区域」釧路湿原や尾瀬など

3. 森林の利用について

一般に開放されている地域など以外に立ち入るには、持ち主の許可が必要。

国有林の場合は・・・イベント開催には入林申請・許可が必要。

観光、レクリエーション目的の場合は必要なし。

国立公園、保安林でのイベント開催は、場合により環境省の許可が必要。

国定公園、都道府県立自然公園などでのイベント開催は、場合により各都道府県の許可が必要。

登山届・入山届は、各地域の警察署へ。

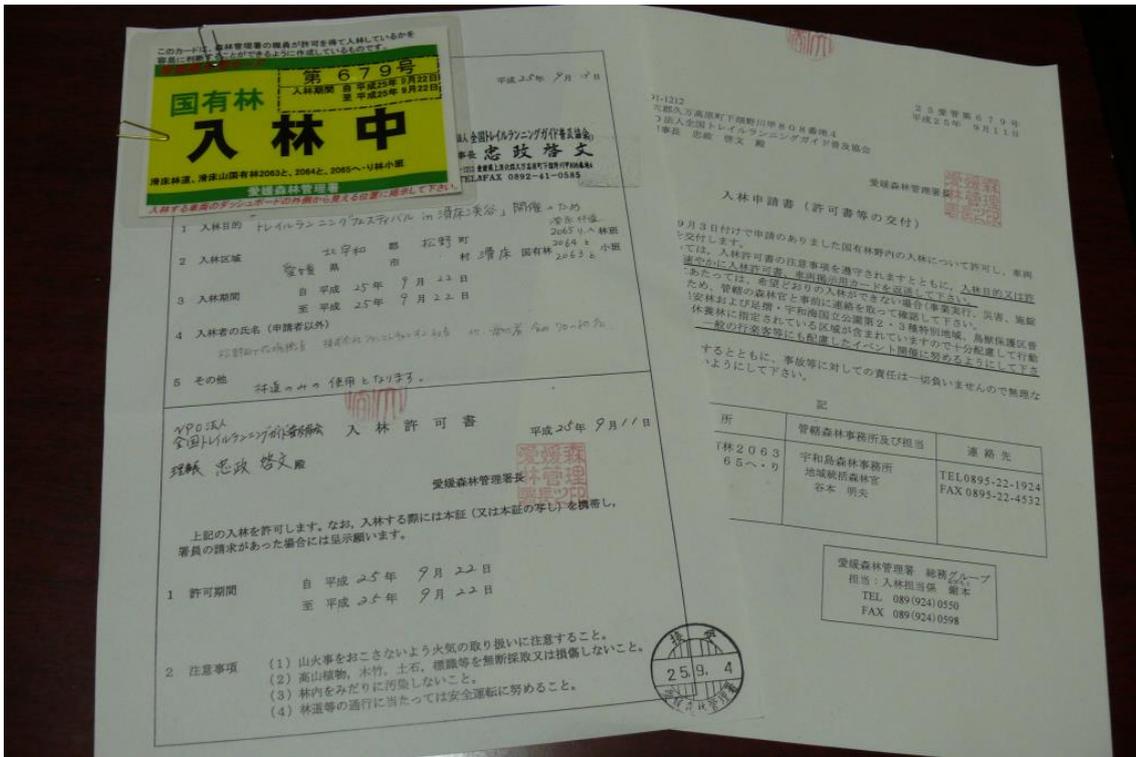
4. 原発事故による森林への影響

森林に降り注いだ放射性物質のうち、最も問題となるのが半減期30年のセシウム。

葉→土壌→葉→土壌を繰り返す、森林内にとどまる傾向（例：チェルノブイリ）。

大雨による表土流出や、森林火災による噴煙、灰などで拡散の可能性。

入林申請・許可書（愛媛森林管理署の場合）



国有林へ入る際には、下記事項に協力をお願いします。

- 1 入林箇所は国有林です。動物や植物を大切にしましょう。
- 2 樹木を傷つけたり、草木や石などを取ることは、法律で禁止されています。
- 3 歩道、広場などの区域より外に入ること危険です。
- 4 また、休息などで、立ち止まる場合には、落ちてきそうな枝がないか、落石の危険がないかなど安全な場所であることを十分にご確認ください。
- 5 登山は、自己責任です。天候や登山情報を確認し、十分な装備と余裕をもった計画立てた上で入山してください。
- 6 悪天候のときは、入林を中止してください。また、天気が悪くなってきたときは、すぐに引き返しましょう。
- 7 立入禁止の表示がある区域には、絶対に入らないでください。
- 8 ゴミの持帰りにはご協力ください。
- 9 タバコの火はしっかり消しましょう。

--- 忠政 恵 (ただまさ めぐみ) ---

平成9年～21年の間、茨城県、静岡県、高知県、愛媛県の国有林の現場で働く。林業技術研究3年、林業契約2年、森林管理7年。現在は、山村・離島など過疎地域の活性化をめざす NPO 全国トレイルランニングガイド普及協会の事務局。

パネリストからのメッセージ【吉永耕一氏】

今回、2013年ウルトラトレイル・マウントフジ(UTMF 富士山一周トレイルラン)の静岡県南東麓区間での植生保全環境調査を行い、中間報告をまとめました。

平成18年(2006年)12月、私達の母体であるふじさんネットワークと静岡県との共催で、「富士山南麓エコツアーリズムセミナー富士山勉強会」が開催されました。専門家の方の講演や環境省自然保護官の方の話を通じて、エコツアーリズムを学習しました。その時の質疑応答の中で、エコツアーリズム推進には、関係者の中でのルールづくりや、自然環境保全を担保するためのモニタリング調査が重要であることが確認されました。トレイルラン大会がエコツアーリズムになるのかはさておき、富士山自然環境を利用する点で、ルールづくりや継続的な自然環境のモニタリング調査が重要な点は同様だと思われま

す。そうした動機で、2012年初めてUTMFが開催された際、南東面の須山口登山道区間で、私達はトレイルラン植生保全調査を行いました。700人を上回るランナーが深夜から朝にかけて同区間を通過しました。コースとなったトレイルや周辺の観察、継続調査から、不適切なコース選定と顕著な連続踏圧の悪影響が見られました。

- 須山口登山道は、傾斜地で雨量が多く、土砂流出や崩壊地がみられ、安全性に懸念がある。
- さらに、過剰と思えるニホンジカが生息し、ニホンジカが土壌侵食などを拡大している可能性がある。
- 700人を規模の連続踏圧によって、著しい土壌侵食、固結化、植生損傷がみられた。
- 大会終了後も、連続踏圧の影響部分では、梅雨や台風などの降雨により土壌侵食(エグレ)が進行、拡大した。
- 6割強のランナーは歩行で通過しており、走行、歩行にかかわらず連続踏圧の影響がみられた。
- 登山道を逸脱した(近道)コースの設定や登山道周辺の生木伐採がみられた。



2012年のUTMFでは、主催者による環境調査が行われました。主催者が環境調査を実施したことは意義深いものです。しかし、主催者の報告書には、調査地点の場所選定や数、結果の解釈、評価に不明な点がみられるにもかかわらず、全体として問題がないという結論になっています。自然度の高い須山口登山道では、「影響はあったが、土壌硬度の変化は裸地化が心配されるものではない」としている点で、私達の調査結果と著しく異なっています。

この主催者による環境調査結果は、翌年 2013 年の UTMF 開催に何も活かされませんでした。「影響があった」とする須山口登山道では、実に 3 倍 近い 2000 人が通過しました。また、前回使われた環境への影響が少なかったスカイライン舗装路をやめ、周辺の国有林、世界文化遺産の登山道、国立公園内登山道が新たにコースとして使われました。

「平成 25 年度(2013 年)トレイルラン植生保全環境調査」は、前回影響が見られた須山口登山道と新たにコースとなった国有林、世界文化遺産の 登山道、国立公園区間の調査です。前回をはるかに上回る 2000 人規模の過度の連続踏圧により、自然環境へ凄まじい影響がでました。

UTMF のホームページでは、2012 年、2013 年の環境調査報告書の公表もないうちに、既に 2014 年の募集が行われ募集数の 2200 人を上 回る応募があったそうです。関係者の間でのルールづくりや第三者専門家による継続的なモニタリング調査がないままに、こうしたイベントが、なし崩 しに継続拡大し開催されることに、強い危機感を感じるのは私達だけではないと思います。富士山は世界文化遺産に登録され、日本はその保全を世界に 約束しました。今回の問題提起・提案が、富士山の適切な利用と保全につながるよう願ってやみません。



パネリストからのメッセージ【山崎裕晶氏】

(1) 登山者から見たトレイルランについて

- ・ どう反応すればいいのか、模索中のような感じ。
- ・ 登山とトレイルランを同時に実践している人は、登山時に観察するトレイルラン、トレイルラン時に観察する登山者、それぞれどのように感じているのか聞いてみたい。
- ・ 率直に言って、お互いに迷惑を感じる問題が多いとすれば、それはマナーの問題と相互理解不足の問題に大別できると思う。

→マナーについて

- ・ 登山にはルールがないので、お互いに不快や迷惑にならぬようなマナーが発生。(釣り場の民主主義)
- ・ だからといって登山者が立派ということにはならず、モラル低下は深刻である。(ゴミ問題など)
- ・ それでも、登り優先でルートを譲るとか、下部の登山者のために落石に注意するようなことは、わりと普通に当然のこととして受け止められている。
- ・ そうすると、例えば、登り中にトレイルランナーが下降して来て、こちらを避けてルートを外して降りつつ落石しているのを見ると、ついつい苛ついてしまう。
- ・ 私自身が先ずそのような場面を想像してしまうこと自体に潜在的な問題(相手の心中の動機から実践にわたる心理の理解不足)がある。

→相手の心中の動機から実践にわたる理解不足について

- ・ つまりは『その人が何故そんなことを好んでしているのか?』についての知識と理解が不足している。
- ・ 登山でもポッカトレニングやビヴァークトレニングと同じでカモンカ山行というのがあった。
- ・ トレイルランは広義の登山の一つ? ...違うらしい...
- ・ 登山者の大部分はスポーツとして限界を追求しているのではなく、キツイことに挑戦するという気負いもほとんどの人には無い。楽しみに歩いて、現実には時々キツイことにも遭遇するが、それが目的ではない。
- ・ トレイルランナーはその逆でキツイことへの挑戦が楽しいのだろう、と登山者は想像する。
- ・ シリアスな様子で登山道を思いっきり走る人がいると、わからない、むしろ「空恐ろしさ」を感じてしまう。
- ・ 結果として、「世界が違う」という防壁を作ってやり過ごしているのが現状か?

(2) 登山者側からのトレイルランに対する先入観

- ・ 上記のように現時点ではネガティブな傾向に傾いていると思う。
- ・ 山は登山するところ、走るべきではないという考え方(言い方)を聞くことがある。
→これは根拠が無い。登山者⇒トレイルランナーという視点を、山村住民⇒登山者に替えて考えればよく分かる。
→登山者は、昔から山に住んでいる人達や、山を仕事と生活の場に行っている麓の人達から見れば、『不思議な連中』だったと思う。

- 登山者側の原因として、解らないものに対して先入観を当てはめてしまう問題点も。
→先入観で誤解してしまう点は、コミュニケーションを通して改善するしかない。

- ジョギング以上に身体に悪そうなトレイルランニングの練習方法や装備を参考にしたい気持ちもある。
→ザックに組み込まれた給水システム等

- 専門誌を読むと、トレイルランニングの過酷さや危険性は緩和され、ウェア、機能的ザック、シューズの宣伝+美しい自然の写真に「山を走ってみよう」と動機付けされ易いようで怖い気がする。
→環境配慮の方向性は必要。正論で、カッコ良くもあり、アプローチし易い(商売にもし易い)。
→山や自然は素晴らしく、壊れやすい。同時に怖い存在でもある点の理解を共有できる(するべき)。



(3) 自然に対するということ

昨年の12月7日に山口県山岳連盟主催で『雪崩遭難対策研修会』が開催され、80名近い出席者が集まりました。4月の白馬大雪渓雪崩遭難者へ黙祷後、いろいろな意見が出ました。

- “雪崩のメカニズムを知るべき” “氷雪学の知識不足だ”
- “登山の鉄則を見直すべき” “ビーコンを使いこなそう” 等々。

私もコメンテーターの一人として『雑誌や講習会の知識からではなく、恐怖感から出発しよう。』と発言しましたが、あまり共感を得ている感じはせず。実際、それは難しいことです...

ただ、白馬遭難捜索に最後まで残って仲間の遺体を掘り出した若者が『今は山崎さんの意見がよく分かる。山が怖い。雪崩が憎いです。』と言ったのが印象的でした。

弱層テストでそれなりの判断が出来ても、山の状態を感じ取る感受性がなければかえって危険。多機能ビーコンを現場で使いこなせるなら持てばいいが、パニックした現場ではシンプルなものを実際に使えた方がいい。アバラングも万一の助けにはなる。しかし最も心に留めておきたいのは、遭難することへの恐怖感、常に失わない山への畏怖。

模範的で優秀なクライマーでも遠慮無く殺してしまう自然の圧倒的な理不尽さには人間は無力です。その怖さを知って、怖さを乗り越える山仲間が一人ずつ増えることに期待しているのが登山界の現状です。

(平成26年1月4日:山崎裕晶)

パネリストからのメッセージ【忠政啓文氏】

NPO法人全国トレイルランニングガイド普及協会について

主な構成員とプロフィール

(会員総数は2013年12月末日時点で18名)

【役員】

理事長：忠政啓文（元50km競歩日本チャンピオン、健康運動指導士、愛媛県歴史の道総合計画オブザーバー）

理事：山西哲郎（日本オリエンテーリング協会会長、日本体育学会会長、立正大学社会福祉学部教授）

理事：酒井浩文（長野県豊丘村議会議員・ソウル五輪20km競歩日本代表、健康運動指導士）

理事：今川弥生（日体協公認スポーツ栄養士、愛媛県栄養士会理事）

【顧問】

佐伯修一（医学博士 元愛媛大学総合健康センター所長・同大学山岳部顧問）

岡田竜平（高知県いの町議会議員 元プロスノーボーダー トリノオリンピック日本代表候補）

西原司（愛媛県議会議員）

山本栄治（NPO法人愛媛生態系保全管理理事長 平成21年度自然環境功労者環境大臣表彰受賞）

大本敬久（愛媛県歴史文化博物館主任学芸員）

RICKY（音楽プロデューサー プロ・ドラマー True Index 所属）

廣道純（プロ車椅子レーサー シドニーパラリンピック800m銀メダル、アテネパラリンピック800m銅メダル）

【事務局長】

忠政恵（元・林野庁森林官）



西条市 石鎚走破大会を中止

来年予定 距離160キロ 安全面など準備不足

西条市は7日、合併10周年を記念し2014年10月末開催を計画していた「石鎚ウルトラトレイル」と、13年10月末予定の「プレイベント」を中止すると決めた。市議会が問題視する参加者の安全確保や自然保護などで十分な対策準備ができておらず、日程が間に合わないと判断したとしている。

市産業経済部の武田仁志部長は「非常に残念。協力を依頼した関係者に多大な迷惑を掛けることになり申し訳ない」と述べ、合併10周年事業をゼロから検討する方針を示した。

市によると、石鎚ウルトラトレイルは未舗装の起伏に富んだ山道などを走るトレイルランニング競技で、市内沿岸部から石鎚山頂付近などを巡る約160キロのコースを48時間以内で走破する想定。12年1月に検討に入り、13年度一般会計6月補正予算案に準備やイベント実施などの費用が計上された。

市議「構想から甘い」／愛好家ら残念がる声

旧2市2町合併による新西条市誕生10周年を記念する「石鎚ウルトラトレイル」の中止決定に7日、関係者から残念がる声が出る一方、「構想段階から詰り方ない」「世界でも一つの自

しかし6月議会産業建設委員会で複数の市議から、山岳地で行われる競技の急患対策や安全への配慮や運営体制などを説明報告した上で執行する旨の付帯決議もされた。

市は、予定通りの事業実施には7月末まで終日の6月21日に補正

中止 準備不足

用500万円を計上した。

しかし6月議会産業建設委員会で複数の市議から、山岳地で行われる競技の急患対策や安全への配慮や運営体制などを説明報告した上で執行する旨の付帯決議もされた。

市は、予定通りの事業実施には7月末まで終日の6月21日に補正

市議「構想から甘い」／愛好家ら残念がる声

旧2市2町合併による新西条市誕生10周年を記念する「石鎚ウルトラトレイル」の中止決定に7日、関係者から残念がる声が出る一方、「構想段階から詰り方ない」「世界でも一つの自

しかし6月議会産業建設委員会で複数の市議から、山岳地で行われる競技の急患対策や安全への配慮や運営体制などを説明報告した上で執行する旨の付帯決議もされた。

市は、予定通りの事業実施には7月末まで終日の6月21日に補正

の実行委員会設置が必要だとしていたが、1カ月余りでは議会の懸念を払拭(ふっしょく)する準備ができなかった。(武田部長 とう)

市は、予定通りの事業実施には7月末まで終日の6月21日に補正

ランニング大会に出場している伊予市の愛好家河内勇人さん(43)も中止を残念がり、「石鎚山を見ながら走れる短い距離のものから始めてみては」と提案した。

一方、西条市議会の榎学議長は「参加者の安全が第一なので、思い切ったやめたことは英断だ。新たなスタートルラインに立ち、合併10周年にふさわしいイベントを実施してほしい」と話した。

NPO法人全国トレイルランニングガイド

普及協会の忠政啓文理事長(久万高原町)は、大会実施には地元住民の理解や自然環境への配慮が重要とし「大々的に(大会が)行われるのはいいことかもしれないが、慌てずよく考えることにならなくてよかった」と述べた。

中国鳥インフル ウイルス遺伝子操作実験開始へ 東大教授ら22人

中国で死者が出たH7N9型の鳥インフルエンザウイルスの危険性を研究し、人での大流行に備えるため、ウイルスの遺伝子を操作する実験を始める。河岡教授らは、実験に先立ち米政府の審査を受ける。

●懇親会のお知らせ

開始時刻 17:15～会費 2,500 円(大人・飲物別)

会場 瀬戸内料理 飛鳥 (下図参照)



主催

岡山スポーツフォーラム

(旧東日本大震災チャリティラン&ウォーク実行委員会)

(旧マスカットランニングクラブ)

協賛 (敬称略)

日本オーリーブ株式会社

村松葡萄園